
第5章

奈多村の歴史

奈多村字図



『奈多村の歴史』は、郷土史研究家 今林松美氏（故人）が生前中、永年に亘り多くの資料を収集され、また郷土の先輩達の話聞き、奈多の歴史としてまとめられたものです。

今林松美氏の意志を尊重し、多少の追加等はさせて頂きましたが、そのままの文章で編集させて頂きました。様々なご意見等、多々あるかとは存じますが、何卒ご理解頂きますよう、お願い致します。

古代、中世、近世

1. 奈多の地名の由来

奈多と云う地名がいつ頃、どうしてつけられたか。このことについては「筑紫の日灘の国」「浪常に立つ浪立つ国」「海辺で浪の多い国」などいろいろの説がある。筑豊沿海誌には『浪常に立つ浪立ちの国なれば 奈多と云う』とあるが、仙覚萬葉抄という本の奈多の章に『其浦 波之音無止時依云奈多』と記されているとのことからこの説が奈多の地名の始まりと考えられる。



奈多海岸



奈多の浜から志賀の島を望む

2. 奈多に伝わる古歌

仁和の頃（885～889年）七条の後に仕え、のちに宇多天皇の寵をうけて「伊勢の御息所」といわれた歌人の伊勢守藤原継蔭の娘で「伊勢」という歌人の

奈多の海あおきなぎさの浜千鳥

ふみおくあとに浪や立つらむ

という歌が夫木集24にある。また夫木集24には

秋の夜の汐干の月の桂瀉

山までつづく海の中道（読人不知）

という歌も残されている。天禄3年5月（973年）の歌合会では、村上天皇の皇子の「御時一宮」の歌で

奈多の浦になつそう海松を

なぎさの波ぞ年はたえける

と詠まれており、奈多の沖約1300m位の所から広い海松の林があり、大古の時代は大陸と続いていたといわれる証ではないだろうか。それから、

香椎瀉夕霧かくれ漕ぎくれば

あえの島には千鳥しは鳴く

という「読人不知」の歌がある。約千年位前であろうといわれているが、香椎の浜から和白の入江、桂崎から三苦水道を経て新宮湊、そして玄海へと出て行く白帆をかけた小舟を偲ぶ時、相ノ浦の艦綱の松の碑も納得して頂けるのではないだろうか。

また、これは少し新しくなるが細川幽斉の筑紫紀行の中に、

名にしおう籠の都のあととめて

浪をわけゆく海の中道

と云うのがあり、宗祇の紀行文の中にも

浪風をおさめて海の中までも

道ある国にまたも来て見む

とあるので、古きよき時代は多くの文人達の往来がしきりであったことが偲ばれる。

3. 丸瀬山

奈多の先住の地と云われている丸瀬山（玲瓏塚）から海の中道へと足を延ばしてみると、塩屋から東へ約3.5km位の処に、高さ約22mの小山がある。奈多の人々は此処を玲瓏塚と呼んでいるが、現在の西方、牟田方に人々が住みつくようになる前から、ここはいわゆる

る「あが」と呼ばれる人々の生活拠点であったといわれている。此处からは黒曜石の矢じりや魚具、土器などが今でも出土している。ここは古代の人々が海上の平安を祈った斎所跡ではないかと思われる。ここから出土した土器は、遠賀川後期に属するもので、他では見られない特有の色合いがあり「あが」と呼ばれた人達が黒川の土で焼物を造っていたと伝えられる。今に残る「あが」、「あがどう」と云う呼び名の古きよき時代を思い浮かべるのも楽しいことであろう。

又、塩屋は古い時代は奈多の地内で、漁業権もこの塩屋辺が境界であったようである。この塩屋の東側寄りの地点を、昭和56年に福岡市文化課が発掘調査を実施したところ、1000～1300年前の立穴式住居や、当時の鉄器、土器、漁労具、女性の髪飾り、位の高い人が身につける帯飾りの金具など沢山の出土品があり、塩屋と呼ばれる製塩所があったことも判明したが、特に注目されたのは、この遺跡から出土した「皇朝十二銭」で、当時、奈良の平城京、大阪の難波京と共に第三の都といわれた筑紫の大宰府と、この奈多とのかわりに思いをはせるのも楽しい。

皇朝十二銭 = 日本で最も古い貨幣で、万年通宝（1235年前）や貞観永宝（1125年前）、延喜通宝（1085年前）となど12種類の貴重な貨幣

4. 海の中道

奈多と海の中道、この海の中道には秘められた数多くの歴史がある。細川幽齋の筑紫紀行の中に『立ち出でて見るに 沙の遠さ三里ばかりも 海を分けて島に續きたり とりわきて細き所は十町ばかり 広き所は十四、五町もありと見えたり 文珠などもおわせしは橋立のこと思いくらべらりき』云々とあり、大正年間に発行された筑豊沿海誌にも、「この地、左右に海を受け、東西三里、その間悉く白砂青松の長州なり、異邦の書に『白沙塗』と書けるもむべなる哉」とある。又、頼山陽が西海を旅した折の作「天草灘」の詩は有名だが、私達が住む奈多の、海の中道の詩もあるので紹介しておく。

「海の中道」 頼 山陽
松林横載大洋潮 萬豊波間碧一條
此景何縁在西海 直須奴僕命天橋

太古の時代は別として、今から約2000年位前は東に和白地区の丘陵があり、和白潟から新宮湊へかけて、内海と外海を継ぐ三苦水道があって、三苦島、大岳島、志賀島の三島であったと九州大学の山崎光夫先生は「北九州沿岸の推移」の中で述べられている。その後、今のような海の中道となった理由として、「一般に砂丘は或る障害物を基点として発達するもので、この地域は季節風が卓越する処で、海水が運ぶ土砂が障害物を基点として

次々と砂丘を形作り、島と島をつなぎ、今日のような海の中道を造りあげるに至った」と述べられている。西紀57年に倭奴国王が後漢の光武帝から授かった金印がどうして志賀島から発見されたのか、これは今日も尚、謎のようである。

360年頃、こうして造りあげられた海の中道の拠点としての奈多という、私達の「ふるさと」の歩み来た道をこれから尋ねて見たいと思う。

746年、筑紫の観世音寺が建立される。この時、本尊として祀るため中華より赤銅の阿弥陀像を船に積んだが、奈多沖で嵐に逢い、今にも危ないというとき、志々岐大明神を船中に勧請し、平安無事を祈った。神の加護により無事に帰りがくことができたので、その後、奈多海岸に社を建てたと伝えられている。又、一説によると三郎天神という神様は荒ぶる神様で、社が沖向きに建ててあった為、奈多沖を通る舟は半帆にして海上平安を祈り航行したと伝えられているが、後年、現在のように東向きに鎮座されるよう建て替えられたとのことである。



5. 三郎天神御縁起抜書

『中天竺の麓からしやくあしろの国 石竹の郷と申すところの王 じんきん天王と申し奉る 御母はきうり山のろく ちの姫と 二懐人ましまし六年目に御誕生 めのと取り上げ見奉れば加美はたまんやしゃの如く 足手は木竹身は黒く御まなこは明星の如く 御魂は五十八と申し伝わる 七歳の御時 水行を夜日遊ばし給う この時の御名をすい野む王と申也 十三歳の御時 天竺 きしゆく 上人の御ま子となり給い 学文はもとよりそう

めい えい智にて即ち神となり給う この時の御子の名を天大力菩薩と申す 悪神故大國に渡し申す この時の御名を五大力菩薩と申し奉る ここも悪神故日本に渡し申す 四國土佐の國秦の郡堀こし川の水上に恵の木七本あり こずえに社ありけるがこの木のもとに石川の明神とておわしますが まるの守護せる地を日月と現わし 夜日 大きく照らし給う いかなる神にましますや 神の日く 我は天竺の神なるが日本に飛び来る その時石川の明神のたまわく さらば秦文申すべしと 悪しきそうもうありければ 小弓に小矢をさしそえて 三郎天神と御名を下し給う 則ち秦の郡七千町歩の処 三郎天神の御領地と申伝也』

奈多は古くから玄海灘と内海の漁業権を持っていた。香椎宮の祭日には、奈多の漁民は神功皇后との由緒に因み、御瀬、古瀬、神海、四ツの網代で獲れた大鯛を献じ、御神幸には猿田彦の鉾を持って参列する。奈多松原の西に吹上の崎といって、神功皇后が神楽を奏した処と伝えられている地があるが、11月19日の「奈多神楽」における早魚神事との関連もあり、志式神社の「おくんち」の項で述べることにする。

6. 志式神社

志式神社の御祭神

・火明神 ・火酢芹神 ・豊玉姫神 ・十城別神 ・雅武王 ・葉山姫神の六祭神といわれている。

由緒

神功皇后が、三韓遠征の折、奈多の吹上の地に軍議所を設けられた時、ここで神楽を奏せられ、外敵から守るための「守護神」として祀られたの説がある。先にも述べたように初めは北向きに建てられていたが、後年、現在地に東向きに建て替えられている。当初、三郎天神と称されていたが、聖武天皇の御代（740年代）に五嶋の志々岐大明神を勧請し、御陽成天皇の慶長2年（1597年）に二社を合祈、志々岐三郎天神と称していた。明治5年11月3日の神社号制定により、志式神社として今日に至っている。

吹上浜

筑前旧跡記によると『吹上浜は 志賀島の東にて 奈多の西にあり 神功皇后の神楽を奏し給う地なり』と記され、神楽記によると『不知火の筑紫の吹上浜にて神楽を奏するものならば などや軍率調事やあらんとや 藤原の大臣は太鼓を打ち 皇后自ら お琴を合わせらる 群臣十二の楽の調子を揃え 糸竹呂律の声々調べ半ばに及びしに 磯良明神遥

か波間に出で給う…云々』とある由だが、今その処を躍坂、又の名を「神楽岸」と呼んでいる。



志式神社

奈多浦志々岐大明神之事

正徳5年（1715年）乙未正月21日、寫書として文書が残っている。要約すると「聖武天皇の御守、天平18年（746年）筑紫の觀世音寺建立の折、本尊にしようと中華より赤銅の阿弥陀像を船に積み、奈多沖にさしかかった時、海上の風波荒く非常に危なかったが、肥前の国五嶋の志々岐大明神を船中に勧請し、風波の難をのがれるよう祈願した処、無事に帰り着くことができたので、その後、この奈多の地に社を建てたと伝えられていますが、この神様も荒ぶる神であったので奈多沖を通る船は、半帆にして航海安全を祈って航行したと伝えられております。」

三郎天神は、古くから火災、盗難などの災厄を除く神様として有名だが、元禄16年（1703年）には、奈多新開築堤の功労者である大野忠左衛門貞勝が御供米を寄進、又、天保年間（1840年頃）徳川家慶の臣、内田伊勢守の伝命で筑前藩主の黒田長博が斯社で火災除難の祈願を行っているが、昭和11年3月の広田内閣成立の時は、巖父の徳平翁がお礼にとお参りをされているのを記憶されている方も多いと思う。

祇園祭と奉納芝居

毎年、7月19日・20日は祇園祭が行われるが、この地方では珍しい奉納芝居が興行される。この芝居の起源は、天明4年（1784年）に奈多村や近郊は大飢饉で疫病も発生し、病死者、餓死者が続出した為、村人は鎮守様である三郎天神に参籠し、悪病平癒を祈願したところ、村人の祈りが神様に通じたのか一日毎に病気も平癒し、又、もとの平和な村に戻る事ができたことから、村人は神様へのお礼にと芦屋から大蔵組を呼び、歌舞伎奉納をしたのが始まりで「萬年願の奉納芝居」として今日も継承されている。

祇園祭で奉納される芝居の舞台は、古くは組み立てられていたが、明治28年に糟屋郡

山田村猪野の大神宮の野舞台を譲り受け、現在地に移設された。戦後の昭和23年に茅の屋根の損傷がひどい為、原材料の茅を探したが近郊では集まらないのでセメント瓦に葺き替えられたが、昭和35年に九州大学の太田清六教授に見て頂いたところ、「惜しいですネ、これだけの野舞台ですから茅葺きでしたら文化財に指定しますがネ」と言われた言葉が思い出される。志式神社は遷座祭の都度、修復、改修工事がされてきたが、社殿の改築は慶長2年（1597年）、延宝6年（1678年）、正徳6年（1716年）、元文2年（1737年）、宝暦6年（1756年）などの記録もある。現在の社殿は大正8年（1919年）に改築され、拝殿は昭和になって銅板葺で改築されて現在に至っている。



奈多志式座での祇園芝居風景

奈多くんち（宮日）

11月19日、20日は奈多くんちの祭りであるが、19日の日没から伝統の「夜かぐら」が奉納される。この舞台も伝統の約束ごとがあって、木臼十二を土台にしてこの上に野舞台前の棧敷の床板十二枚、畳十二枚、屋根を覆うのは舟の帆二枚と決められていたが、最近では木臼もなくなったので、規定の寸法に合わせて土台は鉄骨を組み立てている。この神楽の中に「天神尋ね」「献魚包丁式」「ひれ舞い」が奉納される。この一連の奉納神事を通称「はやま」（早魚）と呼んでいるが、福岡県神社誌によると「千年来の典故なるべし」と記されている。この早魚の起源は、神功皇后が三韓出兵の折、この奈多浜に軍議所が設けられ、その時に皇后の料理に、先祖の人々がたずさわったことによると伝えられている。

早魚神事

早魚神事は、現在では奈多四町内を二組に分けて隔年毎に前方、西方と牟田方、高浜に分かれての奉納神事となっているが、古い時代は網元対網元の競争で、生きた大鯛を早く料理して神前に供えた方にその年の漁場の権利が与えられたので、村人の生活がかかった競争神事であった。その為、一つ間違うと血をみることも多かったという。正に村内を二分する競争神事であったが、最近では古式を伝承する神事として継承されている。

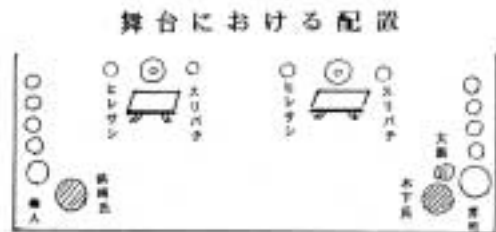
この早魚神事に奉仕する若者は、当番町の24才と25才の若者中から、当日の夕方「く

じ」で料理人、ひれさし、すり鉢の三人が選ばれる。このくじは当番町の代表者や世話人立ち会いのもとに引かれ、三人の役が決まると、先輩の指導により練習に入る。早魚は俎、包丁、まな板、箸、お八寸（お式）と大鯛を使う。昔は息子が早魚年になると、母親は、はた織機で反物を織り上げて11月19日の夕方を待った。当日息子がくじで奉仕者に決まると、母親は反物を裁ち、縫い上げ



早魚神事

て夜半の奉仕着として着せたということである。その頃（今から五、六十年前迄）は、娘の嫁入り道具には、はた織機は欠かせないもので、どの家でも納戸か縁側には必ずはた織があった。奉仕者の着衣は袷付袴一枚、じゅ絆一枚、角帯一本、白足袋一足という定めがあり、着付けは男衆がする。早魚の順序は、十九日の日没くじで奉仕者を定める。早魚宿で先輩の指導で古式の説明を受け練習に入る。夜半少し前になると神楽の進行に合わせて神楽座からの使者が来て汐かい（みそぎ）に行く。大鳥居前で一糸纏わぬ真裸となり、玄海の荒海で襖をして、その足で拝殿前で裸参りをする。早魚宿で奉仕着に着替え、町内会長、世話人と共に神楽座へ。魚改めの儀と盃事。一応の仕技を神官、座元の尾形（木下家）、小枡屋宮総代等へ披露する。二組揃って舞台入りをして本番となる。二組の奉仕者は、“私達はこんな立派な大鯛を神に捧げます”と決められた“姿みせ”の所差をして観衆にアピールする。神官の「見事なお魚ご料理召され」の声のあと太鼓の「ドン」の合図で料理にかかる。このあと早く「鯛のひれ」を座元に届けた方が勝ちとされているが、今日では如何に正しく古式に添っての所差が披露されたかが重要となっている。このあと神官により「ひれ舞い」があり、翌朝、この「ひれ」は玄海の荒海に納められるが、「ひれ」が丘に上がったことはないと言われている。



観衆

7. 海印山 西福禅寺

寺地 東区大字奈多887の1

宗派 臨済宗 東福寺派

由緒

1. 『承天寺の記録』による

イ. 『聖一国師』の開山...と伝えらる

中世歴代の事蹟は不明

江戸時代の万治2年(1659年)9月、

了印和尚が再興し今日に及ぶ。



『海印山 西福禅寺』を正面より拝す。

ロ. 延宝7年(1679年)7月11日、黒田光之承天寺へ奈多の立山6万6千坪を寄進す。

2. 『粕屋郡誌』によれば

開山 聖一国師と云い、弘安3年(1280年)庚辰正月創立

その後、弘治2年丙辰(1556年)了印と云う僧再興せり...と

大正2年(1913年)奈多浦大火の際類焼の厄に遭い、移転新築せり。[境内345坪、檀徒230戸]

3. 川添昭二氏『承天寺の歴史』

イ. 円爾弁円〔聖一国師〕は駿河国安倍郡藁科の生れ、5才で久能山の堯弁につき

ロ. 嘉禎2年(1235年)入宋、仁治2年(1241年)帰朝、帰朝後円爾弁円の在福期間は足掛け3年足らずの短期であったが、旧仏教側から弾圧を被るほどの活発な活動を行っていたのである。

ハ. 円爾弁円は弘安3年(1280年)10月17日に歿すが円爾弁円の直弟・門流の博多を中心とする化導は中・近世の博多文化の展開に重要な役割を果たした。末寺の相次ぐ建立は、その指標的なあらわれであると共に、寺領支配を通じて民衆の経済・精神生活に新たな側面を開いた。

ニ. 円爾弁円は7月15日の博多山笠の始祖と伝えられ、饅頭や博多素麺の製法の初伝者と伝え、博多織の始祖という満田弥左衛門とも関係づけられ、滅後700年を経た今でも博多の人々の生活の中に息づいている。

西福禅寺の『聯芳塔』について

昭和45年11月西福寺裏丘の東北隅に建立された『聯芳塔』には、下記の歴代住職の芳名が刻まれている。

1. 開山 勅謚聖一大宝鑑広照神光国師大和尚

2. 二世 (当山中興)了印孚公禅師

寛文3年(1663年)中興の祖となり堂宇再建。寛文11年(1671年)10月8日歿

3. 三世『石水寿堅座元禪師』 元禄8年(1695年)11日26日歿
4. 四世『文海恒杵禪師』 宝永7年(1710年)2月3日歿
5. 五世『松屋竹公禪師』 宝永8年(1711年)3月19日歿
6. 六世『正禅徹宮禪師』 享保2年(1717年)2月10日歿
7. 七世『要宗津公禪師』 享保6年(1721年)7月10日歿
8. 八世『建堂座元禪師』 元文4年(1739年)4月22日歿
9. 九世『全室寿完禪師』 寛保元年(1741年)8月24日歿
この方は地元、今林金作さん方の家出身と伝う
10. 十世『雪溪欽公禪師』 宝暦元年(1751年)8月24日歿
11. 十一世『悦宗悟公禪師』 宝暦11年(1761年)3月8日歿
12. 十二世『良室久公禪師』 明和3年(1766年)
13. 十三世『宝州山公禪師』 明和7年(1770年)6月21日歿
〔当山再中興〕明和3年の火災に類焼したのを再興す。
地元、今林家から出家された名僧の誉高ほまれかった和尚さん。
14. 十四世『黙堂寂座元禪師』 安永7年(1778年)5月23日歿
15. 十五世『大有慶公禪師』 寛政4年(1792年)9月19日歿
16. 十六世『仁峯思公禪師』 文政4年(1821年)11月12日歿
17. 十七世『真浄文公禪師』 文政9年(1826年)7月27日歿
18. 十八世『荊州義公禪師』 天保12年(1841年)8月7日歿
19. 十九世『玄峯知状禪師』 慶応元年(1865年)5月19日歿
20. 二十『雪溪樹公禪師』 明治24年(1891年)2月1日歿
21. 二十一世『正道覚和尚大禪師』 大正15年(1926年)3月20日歿
前住東福 当山中興
大正2年(1913年)3月、奈多の大火事に類焼。御当主が7年の苦勞の後、大正9年現在地に寺を移して見事に再興され今日の基礎を築かれた。師は京都の名門京極きょうごく家の出と伝う。
22. 二十二世『滴水海和尚大禪師』 昭和33年1月21日歿
前住東福
23. 二十三世 前住東福 当山『実巖真和尚大禪師』9月29日歿

その後は昭和50年に現住職の手によって『鐘楼・納骨堂落慶』と共に700年遠忌が盛大に行なわれた。その様子は中外日報の記事を引用させて頂く。

『中外日報の記事』

イ. 臨濟宗東福寺派は昭和54年に開山聖一國師の『700年大遠忌』を迎えるので、大本山東福寺では遠忌大法要を厳修する計画で準備に着手しているが

- 口．同派で聖一國師によって開かれた名刹の一つ奈多の『西福寺（戸田宣齊住職）』では、全国にさがけて昭和50年11月3日『開山大遠忌』を厳修
- 八．記念事業としてこの日のために進めて来た 本堂・庫裡の増改築 山門・鐘楼・納骨堂の新築などの諸工事をすべて完成し11月2日東福寺派『恵鏡管長』を導師に盛大な落慶法要を厳修する。
- 二．戸田住職は約10年前からこの遠忌準備に着手し、先ず 本堂の改築、続いて 庫裡・隠寮の改築を行ない、戦時中に供出して梵鐘がなくなり鐘楼も老朽化していたので新たに 約2トンの大梵鐘を新鑄すると共に 鐘楼も新築、更に檀徒のため鉄筋二層の納骨堂『常楽閣』の建設も行ない、今回の工事経費は約1億2千万円である。

平和塔

西福寺の御好意により境内の東北の地、東に立花の秀峰を遠望し、北に玄海の潮騒を松籟とときく高台に昭和56年3月移転改築を行なったので、『記録碑』の碑文とともに紹介する。



『西福寺』を中心に聯芳塔・平和塔等の位置図

『平和塔建設記録碑』の碑文

「日清日露戦以降、大東亜戦に亘り『只一筋に祖国の平和と子孫の幸福を念じ』遠く異郷の地に散華された御英霊の遺徳をしのび、これに応えるは郷土の私共の責務と信じ、平和塔建立を計画推進することとなり、即ち、三苦字高浜の国有林を借地し和白村当局、各種団体有志により、昭和23年12月竣工式と慰霊祭が挙行されたのであります。爾来三十有余年、彼岸の中日を例祭日として慰霊の誠を尽くして参りました。昭和30年には、戦友の郷友会で戦没者の『奉名塔』が建立され、昭和35年8月福岡市に合併、和白町の解消を機に平



平和塔

和塔維持奉讃会^{ほうさんかい}を結成し、町管理を引き継ぎ、和白郷友会が慰霊祭を奉仕する事になりました。

昭和46年国有林借地の払下げの報に接するや、自治会長会の協議により、広く郷土の方々に呼びかけ募金活動の結果、土地代六百九拾六萬円を上廻る八百四拾萬円の御芳志を戴き、次いで昭和53年払下げ条件満了を機に、出資者への償還^{しょうかん}を完済^{かんさい}し、平和塔移転場所御英霊安座の適地を選定の処、奈多、西福寺のご好意により、東に立花の秀峰を遠望するこの境内の台地に、移転建設を完成し、昭和56年3月の佳日、装いも新たな平和塔の御霊前で奉讃会・移転改築委員会・郷友会共催で、盛大に竣工式と慰霊祭を挙行し得ましたことは、英霊に対し尊崇の念高き表われと、心から厚く感謝申し上げます。茲に平和塔移転建立の概要を記する所以^{ゆえん}は、今日まで御英霊に対し、心からの御奉仕に感謝申し上げると共に、御英霊の精神を体し、末永く郷土愛・祖国愛に徹する人々の益々多からんことを信じ、撰文彫鏤する次第であります。

昭和56年3月20日」



境内地に建立の「平和塔建設記録碑」

8. 奈多の漁業・農業

よく知られている筑豊沿海誌（大正6年〔1916年〕）より意識抜粋すると、

「奈多濱は奈多浦のあるところ、白砂青松の長洲三里に連なり、風光秀麗なること、須磨・明石に比して多く遜色を見ず。神功皇后の漁場と推察すべき、御瀬・古瀬・こをかい・四つの網代などをいう、名称が今なお現存するのみならず、当時香椎宮に献魚の古例、今に行われ来たり、而して最も古く引き初めしものを、鯛漕網とし、尋で起きるものを鰻地曳網及び田作地曳網とす。玉筋魚大網は安政年間に始まり、更に文久年間に玉筋魚房大網を姪浜より伝習せり。鯛揚線網・鯛地曳網・飛魚流し網・追い網等々 亦一般に行われる。網を以てその主要漁具とす。

なかんずく、鯛網の名は古より、西浦（西区）と並び称され、今尚晩春の候なれば、鯛網見物として、四方より来たり遊ぶもの頗る多し、鯛・鰻・玉筋魚の漁業最も盛んなり。

また、副業に農を営むもの多く、甘藷などの特産あり、風光明媚なるこの地、松林の中に松露^{しょうろう}の名産あり且つ空気中のオゾンを含むるを以て、衛生に適せり、むべなる哉、富豪の徒、相い競うて別荘^{べつそう}を営むもの年々その多きを加える。」

9. 奈多の七不思議

いつの頃から奈多の七不思議といわれるようになったのか、つまびらかではないが、識者の随筆や地方探訪記などにもよくとりあげられているので、ここでも紹介する。

火事がない。 盗難がない。 難産がない。 雀が歩く。 砂が鳴く。 穴蜂がいない。 波の音が聞こえぬ。以上の七つだが、どうしてそうした事が伝えられたのか定かでない。

火事がない...昔の奈多は漁村特有に道巾が狭く、家は殆ど藁屋根で軒先も互いにくつつくように建っているのに火事がない。不思議な処だといわれていたが、大正2年3月に157戸が焼失するという大火にあっている。

盗難がない...家と家との境界が入り込んでいて曲がり道も多く、泥棒に入っても逃げ道に迷っているうちに捕まってしまったという話がある。

難産がない...昔の奈多は殆どの家が半農半漁であったので、奈多のお嫁さんは働き者で非常に健康であったとのこと。また、産気づいた時に「早魚」の切り身をお小湯でいただくと、お産が軽いとの言い伝えもある。

雀が歩く.....言葉の表現の誤りからこうした事がいわれたのか、古老の話ではお宮の雀が浜を歩くと砂が鳴くと古くはいわれていたとのこと。

砂が鳴く.....奈多の外海岸は、全国でも数少ない「鳴砂の浜」だが、これは原石が石英で、海が美しいとよく鳴るが、砂が汚れると鳴らなくなる。いつ迄も美しい奈多の浜で「キュッ、キュッ」と言う音色を聞かせて欲しいものだ。

穴蜂がいない...昔の奈多は春ともなれば、一帯に紫雲英と菜の花が一面に咲き競い、蝶や蜂が飛び交っていた。にもかかわらず、穴蜂の巣も無く不思議な処だといわれたものだが、この土地は砂地であり、穴蜂の巣造りが出来なかったことに起因する。

波の音が聞こえぬ...漁村と云えば波音を枕辺に聞くものだが、内海は波静かであり、外海は防風保安林で波音が遮られているので、里人の耳に波音は届かないことから「漁村であり乍ら、波音が聞こえない不思議な処だ」といわれた。

10. 筑前八所松原

江戸時代の文書の中に「筑前八所松原」として、次の松原が記されている。

花見松原 古賀松原 上府松原 楯松原（下府） 奈多松原 白浜松原

舞松原 地蔵松原のハカ所だが、舞松原や地蔵松原は、今日ではその残影を探すのに苦勞する。奈多松原もまた戦後の松喰虫の被害が甚大で瀕死一步前の状態であり、皆で力を併せてこの松原を守り育てねばと思う。



奈多の松原

11. 博多八景

博多近郊古図（文化9年）の写書の中に博多八景が記されている。

- 荒津夜雨（西公園）
- 博多帰帆（袖の湊）
- 名嶋夕映（妙見島暮影）
- 奈多落雁（雁ノ巢）
- 宝満山暮雪（宇美）
- 箱崎晴嵐（日照り雨）
- 横岳晚鐘（太宰府の鐘）
- 分杉名月（若杉山の秋の月）

以上のハカ所に、その頃の文人達が詩歌に託して美景表現を創っている。

12. 奈多の宝塚

幕藩時代の終わり頃、奈多内海岸には、糟屋や宗像南部からの福岡藩への御用米の集積場があった。馬は三俵、牛は二俵の米俵を背にこの奈多の浜に集められた。場所は今の宝塚の海岸で、ここには浜田屋（現在、製麺所の今林京三氏）、牟田方の古枅屋酒造場（今の浜崎洋介氏）が回漕業をされていて、御用米倉から船一隻に三十八俵を積んで荒津の福岡藩の米蔵へ運んだとの事である。（古枅屋、故人の浜崎宗之助氏談）

13. 奈多落雁

打ち寄せる波にもなれて呼びかわし
奈多の白州におつる雁が年
数里白絹流海風 無邊中洛玉沙空
桃雲雁宇知多少 呼喚回翔落上芳

この詩歌は、謙という方の作だが、何回も繰り返し復唱していると、昔の雁の巣、小瀬抜のあの松原の中に汲われていくような心地になる。「雁の巣」は本当に良い地名であると思う。

以下、年代順に、奈多の歴史を追ってみよう。

1281年（弘安4年）

弘安の役が起こり、香椎、和白方面の守備は大友泰時の部隊であった。志賀島を占領した蒙古軍を攻略するために、和白、奈多、海の中道を通り志賀島へ向かったという。この頃は三苦水道の陸地化が少しづつ進んでいた頃である。

1334年（建武元年4月30日付）

後醍醐天皇の綸旨に、「香椎宮殿上大宮司職 同給免有次名 田畑 山野屋敷并 奈多有次名田等」とあり、大宮司 氏光に安堵されている。多々良浜の合戦で足利尊氏が菊池氏を破る。また、この年は楠正成が湊川の戦いで戦死をした年でもある。

1350年～1450年頃（正平～安永年間）

倭寇が盛んに、明国や今の韓国を侵した時代だが、その倭寇の船印は中央に八幡大菩薩、右に春日大明神、左に志々岐大明神と染め抜いた大旗をかかげていたという。これは平家水軍の流れを汲む私達の先祖も、これに加わっていたのではないかと考えられる。また永禄年間には、倭寇は明国まで足を伸ばしているが、この倭寇の中に先にも述べたように、平家水軍の流れを汲む人々がいたので、これらの荒男の束ね役として、今林左右卫門大夫範興の嫡、七郎を山田郷より奈多に差し向けて住まわせている。その時の文書が今林の祖である大綱に伝えられている。

『筑前之国 宇美之庄に居住 今林の左右卫門大夫範興の先祖 同国 山田のこんどう
とごうす 嫡に無隠候 甲乙存知のことに候わんぬ 就中 大夫は宇美の今はやしの
ゆえに 今林の左右卫門大夫とごうす

仍 七郎ことは愚身一家のことに候 そのみちがいあるべからず候 苦くは子孫若輩の
ともがらそんちなからんや 此子孫のしるしして 七郎 所につかわし候 如件

干時永亨六年十一月十五日

今はやし左右卫門大夫範興 書印』

1470年代（永享年間）筆捨松

ちょっと聞き慣れないことだと思われるかもしれないが、雪舟禅師と云えば、南宋画から日本の水墨画の新境地をひらいたことで有名でだが、その雪舟禅師が西海（九州）を旅し、薬王寺に泊まっていた折、薬王寺の住職から所望されて、この奈多浜の美しさに筆をとった。しかし、仲々筆が進まず、遂に「拙僧輩の筆にては表現し難し」と筆を投げたといわれる「雪舟の筆捨松」が薬王寺にあるとのこと。

1560年頃（永禄年間）

立花城主、西大友左右衛門道載と、奈多の塩売り弥太郎の女房「桂」をめぐっての悲しい物語は、歴史小説家で故人となられた長谷川伸先生が「浪音悲し奈多の白浜」として書き下してあった。昭和30年頃だったと思うが、この小説について、創作物語か史実に基づいての作かを問い合わせたところ、「あの作は、東尋坊の悪僧と、塩売り弥太郎の何れかをとらんとし、弥太郎のこを取り上げたと思いますが、大友戦記が大友軍記の何れかにありしを探りし記憶あり、史実は歪曲していませんし、古くは謡曲、徳川期の随筆でも読んだ記憶があり、昭和初期の随筆もありましたので、御地では古くは伝承されていたのではないか……云々」との返事を頂いた。

1571年（天正9年）

豊前杵築の奈多八幡宮神官の家来が奈多に移住し、浜崎家の祖となると伝えられている。また、高浜の護宝寺の祖も国東から今林妙仙という人がこの地に移り住み、天台宗を広め田畑の神祀（荒神）を始めたのもこの頃だと現住職の上野順晃師も話しておられる。

1587年（天正15年）

豊臣秀吉の九州討伐の年だが、立花城を攻めていた島津勢は、小早川の大軍が小倉に着き、立花へ向かっているとの報せに、香椎宮や近くの民家に火を放って逃げ帰った。この時、島津の兵はこの奈多に来て、三郎天神社に祀ってあった赤銅の阿弥陀像を盗み取って帰るが、いずこかで捨てられたとのこと。

1588年（天正16年）

香椎で焼け出された木下一族のうち、今の御方（木下家）が奈多に移住する。武内宿彌との縁故から、木下家の裏山に武内社を祀ってあるが、西方の子ども会の夏祭りも毎年7月14日に武内様としてお祭りが行われている。



武内神社

1597年（慶長2年）

志式神社としての最も古い棟書として残っているものに「慶長二年丁酉歳 社主新宮惣之市 志々岐三郎天神 奉葦替社殿一宇大漁満足三月吉日」とあることから、この時、三郎天神と志々岐大明神を合祀し、このあと「志々岐三郎天神」と称えるようになったという。またこの年の2月に、長崎で処刑された二十六聖人は、船で芦屋に上り、宗像～新宮～奈多と海の中道を歩いて、志賀島から船で長崎に向かったのが1月の30日だったと伝えられている。

1605年（慶長10年）

この年の浦触れによると「なだ」と見えているが、村高は「旧高旧領」で109石余で村位は中（續風土記）

1659年（万治2年）

長崎警固の役目を持つ福岡藩では、大砲の習練の為、幕府の許可を得て奈多の白浜を教場と定め、石火矢役人が、しばしば練習の大砲を放った（新訂 黒田家譜）。宿舎は西福禅寺と役所で、若殿様は役所に泊まり、家来達はお寺で寝泊まりをした。ご存知の方は少ないかと思われるが、雁の巣クラブ前バス停の内海側に少し小高い丘があり、ここに大砲をすえて、白浜の標的に向けて発射訓練がされたとのことで、小瀬抜に住んでおられた栗川健次氏もこれを聞き伝えておられる。

1660年（万治3年）

黒田家の臣、加藤弥左衛門成昌（鉄身）は、藩命により白砂斥齒の地といわれた地に、苦勞を重ね風砂止め、養土の移植等に努め、遂に松の植林に成功した。斥齒の地であり風波に枯死の連続であったが、これを乗り越えて今日の白砂青松の海の中道の美景が完成された。これに続いて三苫の植林も進められ、時の責任者、黒山勝左衛門の功を讃えて小字名に「黒山」の地名が残されていると聞いている。

1663年（寛文3年）

西方の旧公会堂(旧魚市場)のあった処に、了印孚公禅師によって、奈多西福寺が中興される。



西福禅寺

1700年（元禄13年）

奈多村、村内の古枡屋酒造場（浜崎洋介氏方）が、この頃、最も盛業であったとのこと。

1703年（元禄16年）

黒田家の権臣、大野忠左衛門貞勝、藩命に依り「奈多、塩浜開」を施工。全て藩財を用い、奈多の住民からの負担を取らず完工した。和臼、三苫の人々を移して塩浜村を起こし、堤防内に塩田三十町歩を開いた。



新開堤防

1733年（享保18年）

近郊一帯は大飢饉となる。奈多の庄屋浜崎は、年貢取立不行届のかどに依り、奈多村追放となる。

現在、子孫の方は唐津市内で商売をされていて盛業とのことである。

1738年（元文3年）

高浜入口の地藏堂（中央のお地藏様）が建立される。

1746年（延享3年）

志々岐三郎天神宮に、狩野法眼弟子の上田主勝の筆になる絵馬「舞」が奉納される。

1775年（安永4年）

奈多村前瀧に濱田屋（米、雑貨）が創業される。（現在の浜田屋製麺所）

1784年（天明4年）

いわゆる天明の大飢饉の年で、奈多村と近郊では餓死者が続出する。奈多村では疫病まで発生し、且ってない最悪の年となった。村人は氏神様に参籠し悪疫退散の祈願をした。村人の願いが神に届いたのか、一日毎に天候も旧に復し、悪い病気も一日毎に癒え、また平穏な村に戻ることができた。村人が神様への御禮として芦屋から大蔵組を招いて、奉納の芝居を催したことは今日も継承されている。

1790年（寛政年間）

民家は、西瀧、浦瀧、牟田瀧、出来町、ショウジガミ、前瀧の6ヵ所がある。【續風土記、付録】

1810年（文化年間）

民家160軒が一カ所に集落をなし、漁業を生業とする。田畑高は約104石で、うち8町余は入海を隔てた、唐ノ原村片男佐（今の香住ヶ丘校区一帯）にある。【続風土記拾遺】

1819年（文政2年）

今林彦四郎が、初めて奈多に甘藷を植え奈多藷の栽培が始まる。

1825年（文政8年）

奈多村の人数、978人（男562人、女416人）出生者32人（男17人、女15人）、死者16人（男7人、女9人）。【箱崎明石家文書】

奈多松原は年2回、良品の松露が収穫され、松葉は薪とし、また甘藷の収穫も多く、海陸の産物に恵まれ村人の暮らしは豊かである。【続風土記拾遺】

奈多浜では砂鉄を産し、鑄鉄とするほか、小刀や包丁の研磨粉として用いられる。【続風土記】

1850年（嘉永3年）

大暴風があり、続いて嘉永5年にも大風、大雨があり御開の土手（今の奈多団地と宇美線の間の道堤）が大破決壊し村内一面の海となる。

1853年（嘉永6年）

暴風雨に依り、貧窮のどん底につき落とされた奈多の窮状を見かねた、博多の三商こと、大山忠平（茶忠）、石橋七蔵（酒造業の鳥羽屋）、藤崎貞次（菊野屋）が銀主となり、奈多宝塚から塩浜の船通しの間、八百間の内海岸堤防の第1期工事に着手、4月15日に工事関係者800余人によって盛大な入場、鍬入式が行われた。

1858年（安政5年）

第1期工事が安政3年に完工したのに続いて、第2期工事の下和白海岸（二ノ開）までの550間の工事にかかり、延長1350間の大工事が完成した。



奈多新開堤防工事の手形

近代～現代

奈多の小字

明治以来長年に亘って親しまれた大字、小字だが、平成3年8月に町界町名が実施された。旧呼名の小字を紹介する。

- | | | | |
|-----------|------------|---|----------|
| 1. 番 追 | 一番地 | ～ | 二百四十八番地 |
| 2. 開 | 二百四十九番地 | ～ | 五百七十八番地 |
| 3. 前 田 | 五百七十九番地 | ～ | 六百八十一番地 |
| 4. 宮ノ下 | 六百八十二番地 | ～ | 九百九十三番地 |
| 5. 堂 岸 | 九百九十四番地 | ～ | 千百三十一番地 |
| 6. 魚祭 網 | 千百三十二番地 | ～ | 千二百三十三番地 |
| 7. 宮 山 | 千二百三十四番地 | ～ | 千二百四十二番地 |
| 8. 中裏付 | 千二百四十三番地 | ～ | 千二百九十七番地 |
| 9. 丸瀬山 | 千二百九十八の二番地 | | |
| 10. 小瀬抜白浜 | 千二百九十九番地 | | |
| 11. 白 浜 | 千三百番地 | | |
| 12. 小瀬抜 | 千三百一番地 | ～ | 千三百六十一番地 |
| 13. 雁 巢 | 千三百六十二番地 | ～ | 千四百二十八番地 |
| 14. 裏 付 | 千四百二十九番地 | ～ | 千七百六十三番地 |
| 15. 宝 塚 | 千七百六十四番地 | ～ | 千八百番地 |
| 16. 御 開 | 千八百一番地 | ～ | 二千二百 七番地 |
| 17. 新 開 | 二千二百八番地 | ～ | 二千五百九番地 |

浜地として別途二千五百十番地～二千五百十八番地がある。これは安政堤防完成後に奈多団地の大ゴセの中に新しく出来た畑地や、雁の巣レクリエーションセンター内海岸の一部が含まれている。

奈多の小字図



1872年（明治5年）

戸籍制度ができて人口調査が実施される。当時の和白白地区の戸数457戸 人口2,316人（現在の和白白、美和台、和白白東、奈多三苫の5校区）その頃の奈多村の戸数241戸、人口1,247人（男631人 女616人）

漁家数130戸

船舶数81隻（商船1隻、漁船62隻、小漁船8隻）

網 数193網（鯛網5、鰯網4、流網32、鯨網22、アゴマカセ16、ハツ網7、地引網4、夾網8、ヒラス網4、底網50、カナギ網38、鯨網3）



鯛網風景

1873年（明治6年）

米相場が急騰した為、筑前竹槍一揆が起こっている。この年は明治新政府が発行した大政官札と藩札とを引き換えさせる為、大蔵省は検査権助の中村義臣外2名を、佐賀、三潁、大分、小倉、福岡の5県を廻らせていた。一行がやっと任務を終え帰路につく時に、新政府の官員と云うことで、一揆勢に追われ最後は多々良河畔で遭難することになるのだが、この事について唐ノ原の夢野久作氏の処におられた紫村一重氏が「筑前竹槍一揆」の中で詳しく記されている。以下要点を抜すいすると、

「中村義臣一行が奈多に着いたのは、6月20日の夕暮れでしたが、やっと浦役所を探し当てて中に入ると、ひと騒ぎあった後とみえ、がらん洞になった役所の片隅に、2、3人の浦役人らしい人が、何かコソコソと話し合っていました。突然の見知らぬ来訪者に役人衆も驚きました。一行が身分をあかして『福岡返船を出して愜しい』と頼みましたが、役人衆は『今、村に居るのは女、子どもと年寄りばかりで、とても福岡までは...』と断られ、一行はすっかり困り果ててしまいました。途方にくれている三人を見かねて、今林清左衛門と、安河内又三の二人は、すぐ近くの木賃宿、西藤弥平さん方へ案内し、一夜の宿を頼むことにしました。すると宿の主人、西藤弥平さん（現在の武氏の曾祖父）は、それは難儀な事だと、快よく一行を迎え入れてくれたので、三人は久し振りにお湯にも入り、酒食のもてなしも受け、すっかり生気を取り戻し、何日振りかの床に身体を休めました。ところが間もなくあたりが騒がしくなり、竹槍で武装した一揆勢が鐘や太鼓を打ち鳴らしながら、『この奈多に警官が逃げ込んでいる筈だ、出さんと浦中を焼き払ってしまうぞ!』と、一軒一軒探し始めた。宿の主人は中村義臣一行に急を告げ、裏の松山へと逃がしてやりましたが、その二日後に下原で発見され、引廻された上、多々良河畔で一揆勢の犠牲となりました。中村義臣一行にとっては牟田方の西藤弥平さん方での夕食が最後の晩餐となりました」

この明治6年に、奈多の踊舞台を借用して、奈多下級小学校を開設する。（師匠は手習師匠の寺島勝臣氏）また、この年には、奈多浦と志賀間で長期に亘る漁業紛争が起る。

1875年（明治8年）

奈多、和白地区で菜種の栽培が始まる。

金持ちの家で菜種油を使っの、ランプの使用が始まるも、一般の家庭では、ローソクと行灯を使用。

『星を頂きて家を出で、月影を踏んで帰る。ようようにして足を滌ぎて、夕餉を取る。腰一ツ伸ばす間もなく夜業に従う。行燈とて多くは魚油を用い、座敷用は菜種油にして、又神佛にも点じた。勝手元は魚油を使うされど暗きこと言うべきもなし。男子の夜業するは、土間に松の根株の肥えた木を山より取り来たり之を焚く、然うして、沓作り、縄ない、筵づくり、女は米搗き、麦搗き、又は糸引き、衣寿きの業あり、その定めとして

男夜業	秋冬一季中	小縄、千尋 沓七十五足（一夜五足）
女夜業	秋冬一季中	一夜に米搗き一斗 麦荒搗、中搗、仕上のうちどれか一斗 または糸引十匁又は、篠巻綿半切』

1877年（明治10年）

西南戦争が起これ、奈多からは徳重喜作他数名が従軍した。鹿児島島の私学校を見て帰り、「子弟の教育には、独立した校舎でなければいけない」と、校舎の建築を呼びかけるが『学校より格好せれ』と言う老人が多く、実現せず。この頃から奈多諸の耕作が盛んとなる。

1878年（明治11年）

鰯の大漁に湧く。



昔の奈多の浜



昔の奈多の浜

1881年（明治14年）

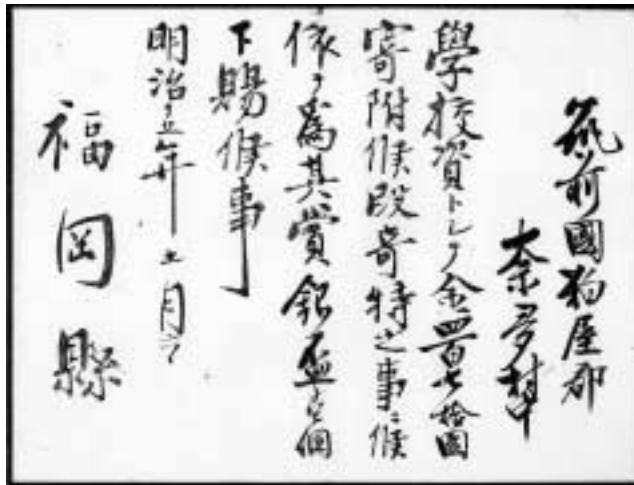
奈多、和白地区にランプが普及する。

これまでは一般家庭は行灯、灯心、ローソクであった。

この頃、奈多外海岸に鯨が近づく。村中をあげて捕獲にかかるも鯨は網を破って逃げ、がっかりしていたが、その翌日、また鯨が近づいているとの浜見からの知らせで、今度はカズラ網を補強して村中総出で捕獲にかかり、遂に鯨捕獲に成功する。

1882年（明治15年）

鯨が獲れた益金を学校資金として寄附したので、福岡県は賞詞と銀盃を贈ったが、奈多の鯨学校といって、有名になった。正しくは「奈多小学簡易科」であるが、その時の福岡県の賞詞は次の通り。



鯨が捕れた時の福岡県の賞詞

1887年（明治20年）

出来町入口の藤尾船大工さんの横に奈多駐在所が開設される。初代は伊丹房雄巡査であった。

1889年（明治22年）

2月 大日本帝国憲法が発布。

4月 上和白村、下和白村、塩浜村、三苦村、奈多村の5か村が合併し、和白村が発足する。

上和白村	64戸	336人
下和白村	49戸	262人
塩浜村	35戸	188人
三苦村	92戸	490人
奈多村	262戸	1,363人
合計	502戸	2,639人

この年から、奈多、和白地区の綿花栽培が減少した。

1892年（明治25年）

奈多外海岸の石積み波止工事に着工。この年の早魃で米1升が10銭となる。また、この年は博多の川上音次郎のオッペケペーが流行する。



奈多村時代の地券

1893年（明治26年）

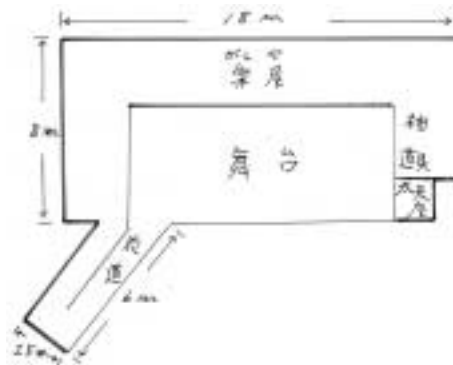
この年の春の青柳高等小学校（糟屋郡北部の各村の通学区）卒業生は男16人、女2人でこの和白村からは古枅屋の浜崎宗之助さん一人であったとのこと。

1895年（明治28年）

奈多宮山の志式神社前に糟屋郡猪野より野舞台を移設。この舞台は廻り舞台となっていて、舞台を廻す時は青年が床下に入って、長い棒を肩にしてロクロを廻した。現在は固定されている。



奈多の志式座



1898年（明治31年）

奈多白浜で福岡連隊の実弾射撃演習が行われた。

1899年（明治32年）

明治25年に着工した、外海岸の波止工事百間が竣工する。

1900年（明治33年）

学校制度が変わり、和白二反田に和白高等小学校が建つ。（通学区は和白、香椎、新宮、立花の5カ村）

1901年（明治34年）

奈多くんちの神楽奉納が宇美神楽に変わる。前年迄は郡内の神官が奉納。



奈多おくんち神楽「^{えびす}蛭子舞」

1902年（明治35年）

5月、奈多～土井間、12月に奈多～西戸崎の鉄道工事に着工、明治37年1月に奈多駅（現在の雁の巣町内公民館前）、12月には和白駅も開設される。明治38年には宇美迄開通し博多湾鉄道時代となる。尚、奈多～西戸崎間の汽車賃が8銭、奈多～香椎間は7銭であった。

1903年（明治36年）

小学校が1村1校制となり、塩浜古川（現在地）に和白尋常小学校が建つ。
12月に奈多前方の今林儀蔵氏方に奈多郵便受取所が開設される。

1909年（明治42年）

奈多、和白地区で養蚕業が始まる。

熊本専売局長、浜口雄幸（のちの首相）塩浜の塩田を視察来村。

1910年（明治43年）

9月に入り、塩が専売制度となり、塩浜の塩田が廃止される。

博多湾鉄道所有の奈多宝塚の松林を、別荘地として坪50銭で売り出す。

奈多外海岸に防風保安林として6年継続の植林が始まる。

1912年（明治45年）

和白尋常小学校に高等科を併置、和白尋常高等小学校となる。

1913年（大正2年）

3月13日、奈多大火災が発生。304戸中、152戸が焼失、損害約20万円と報ぜられた。このあと、奈多再建の為、唐原村内にある奈多村の分村である片男佐（現在の香住丘）の共有山林を博多湾鉄道の太田清蔵氏や荒津長七氏に売却し、奈多の各戸に100円を配分して再建にあてられた。

片男佐山林分付	
今林半五郎	100
今林惣次郎	100
今林次郎	100
今林庄助	100
今林清蔵	100
今林長七	100
今林文吉	100
今林吉吉	100
今林輝七	100
今林正吉	100
今林宗助	100

片男佐を売却した時の控帳

1914年（大正3年）

奈多、和白地区に電燈がつき始める。

1915年（大正4年）

奈多、和白地区の養蚕業が60戸を越え、景気上昇する。

1916年（大正5年）

奈多消防組（和白村第1部）が組織される。初代組頭 今林半五郎氏、小頭 今林惣次郎氏、浜崎百松氏であった。

1917年（大正6年）

和白海岸に許斐硝子工場が建ち、1升瓶、ラムネ瓶を製造する。
奈多郵便受取所が、和白郵便局と改称される。

1919年（大正8年）

志式神社の神殿、拝殿、社務所が新築着工。盛大に御遷宮が行われる。
この年、名島に九州電力名島発電所ができる。

1920年（大正9年）

第1回国勢調査が行われる。和白村人口（現在の5校区）は3,122人であった。因みに香椎村は2,548人。筑前新宮駅が開設された年でもある。

1921年（大正10年）

5月から和白～新博多間の鉄道工事が始まる。（現在の貝塚線）

和白の許斐硝子工場従業員と、奈多青年との間に争が起こり、半鐘が打ち鳴らされ流血騒動となる。

奈多字中裏付に長命研究所（ソーエラン）が建つ。九大の宮入博士の発明された駆虫薬で、東京警視庁が「日本一」の折紙をつけたので一躍有名になったが、後に第二次大戦の戦況悪化により、台湾からの主原料である海人草の入荷がストップしたので、遂に昭和18年に閉鎖された。

1923年（大正12年）

奈多宝塚に海水浴場が開場する。

和白～宮地嶽の鉄道工事着工（現在の津屋崎線）。この工事で三苦託乗寺裏側の切り割り工事で事故が発生し、当時いろんな噂が流れた。



宝塚海水浴場

1925年（大正14年）

奈多の江切（いな取り）の最盛期で、志免の海軍炭坑の抗夫さん達で賑わった。
東京愛宕山からのNHKラジオ放送が始まり、博多にデパートの第1号玉屋が建つ。
第2回国勢調査では、和白村（現在の4校区）人口3,523人であった。
奈多に味噌干し加工が始まり、牟田方の茂平鯨が白浜に打寄せられて歌が出来たという。

1928年（昭和3年）

昭和天皇即位の大典。奈多4町内会では町内毎に花車を造り、町民総出で和白村内を巡回し、大盛況だったとのこと（どんたく隊）

1929年（昭和4年）

宮地嶽線が汽車から電車に切り替えられる。
和白～志賀島間の新県道工事に着工。竣工は昭和11年11月であった。

1931年（昭和6年）

和白村役場に専用電話がつく。「和白1番」の木札も現存している。現在では和白公民館に606 - 3001番として引き継がれている。

1933年（昭和8年）

女子訓育院の敷地を和白村が寄附。その後、愛国女子学院となり、昭和21年から和白青松園として今日に至っている。
和白郵便局で電話交換業務を開始する。村内の加入台数8台。

1934年（昭和9年）

福岡陸上飛行場の建設用地が雁の巣に決定する。
和白村役場庁舎を改築。予算額3,830円也。

1935年（昭和10年）

1月7日、雁の巣飛行場建設起工式。

1936年（昭和11年）

6月6日、頼母木通信大臣臨席のもと、福岡陸上飛行場の開場式が挙行された。
和白～雁の巣間の舗装工事が終わる。

宇美～西戸崎線の奈多駅を廃止し、奈多中裏付に雁の巣駅を新設。奈多東口駅ができる。



雁ノ巣飛行場



雁ノ巣飛行場

1937年（昭和12年）

支那事変における和白村内の、この年の戦死者3名。

1938年（昭和13年）

3月、女子訓育院は愛国女子学院となる。

この年も支那事変の戦死者3名。

1940年（昭和15年）

塩浜の「カネン手」に、渡辺鉄工所の試験飛行場が開設される。

雁の巣の山田マキ女史より、和白尋常高等小学校へ電話「和白局22番」が寄贈される。

この年の航空運賃、雁



試験飛行場の塩浜すべり

の巣～大阪30円 雁の巣～東京55円であったとの事。

支那事変の戦死者3名。

1941年（昭和16年）

小学校が、国民学校と改称される。

紀元2600年事業として、雁の巣飛行場が30万坪拡張され国際空港となる。

12月8日、大東亜戦争（第二次世界大戦）に突入。この年の戦死者3名。

1942年（昭和17年）

村内の戦死者7名となる。

1943年（昭和18年）

ビルマのパーモ長官、雁の巣に飛来し大歓迎を受ける。

村内の戦死者14名となる。

1944年（昭和19年）

博多湾鉄道が国鉄に編入され、奈多東口駅が廃止される。

村内戦死者が59名と増大、戦局危うくなる。

1945年（昭和20年）

郷土防衛の為の赤城隊が、和白村内に駐屯する。

雁の巣飛行場が空襲を受け、奈多の民家も16mm機関砲の銃撃を受ける。

5月に席田飛行場が開場する。

8月15日無条件降伏。雁の巣飛行場は米軍が接收、日航の幼年工宿舎（現在の雁の巣病院）も米軍人の宿舎として接收される。

第6回国勢調査、和白村人口6,063人（現在の和白地区5校区）

この年の戦死者57名。



B 29が来襲し爆弾を投下する

1946年（昭和21年）

愛国女子学院は和白青松園となる。

戦死者5名が確認発表される。

1947年（昭和22年）

戦後教育基本法が改正される。6,3,3制に伴う市町村自治体の義務教育施行により、4月に海軍送信所跡地に町立和白中学校が開校する。



和白中学校

1948年（昭和23年）

和白中学の鉄筋講堂で第一回の成人式が行われる。

上和白（現在のゴルフ場附近）へ台湾引き揚げの田中重雄さん他が入植される。

5月に、第1回村民野球大会を開催、ステテコチームやドンゴロスのグローブで15チームが参加する。

1949年（昭和24年）

昭和天皇、和白青松園に海外引揚げ幼児を慰問され、村中をあげて奉迎する。

御歌

よるべなき幼児どもも

うれしげに

遊ぶ声きこゆ

松の木の間に

高浜の丘に戦没者慰霊塔（平和塔）が建ち
祭典が行われる。



昭和天皇、青松園を慰問される

1950年（昭和25年）

新開築堤記念碑（木柱）が建ち、孫の大山忠平翁来村。

米軍関係の女性で、自主的グループとして「ホワイト リリークラブ」が発足する。

第7回国勢調査、和白村人口6,872人と発表される。



新開築堤記念碑と大山忠平翁

1951年（昭和26年）

高浜の松林の緑の中に奈多愛育園が建つ、園長はヘレン・ハーダー宣教師。

奈多で、2軒の漁家が海苔養殖を始める。

カナギ網漁、減り始める。

1952年（昭和27年）

奈多4町内公民館（今林久二総区長）が住民の勤労奉仕と募金によって建つ（現在の奈多中央公民館）。



奈多中央公民館

朝鮮動乱に伴う米軍輸送基地として、雁の巣福岡空港に米軍航空隊が駐留。駐留軍との対応調和のため雁の巣駐在所、粕屋保健所が建つ。

1953年（昭和28年）

6月の大雨で村内大洪水となる。「28水害」と指定された大洪水は、奈多地域内でも住

宅が浸水。公民館前から海面の様に満水で、塩浜、和臼まで完全に水に覆われた。鉄道と堤防（沖の土堤）まで、表面が所々みえるだけの光景は、太古年代の塩浜、三苦水道時代を思わせた。奈多集落には、裏山からの汚水が麓の家々に流入し、家財の保全に大わらわの様で、殊に高浜の山ノ上の集落は完全に床上浸水し、池の中浮家の状態であった。和臼青松園裏山一体も大池の様で、排水路もないため高浜地域前道路を掘削して排水する外なしと、消防団総動員で排水対策をおこなった。消防団は他の地でも浸水家屋に対する救助活動等により、人的被害もなく対応された様である。

西日本新聞社後援で、和臼海水浴場が開場する。

県道志賀島線の舗装工事が完了する。

1954年（昭和29年）

福岡高等無線学校（福岡工業大学の前身）、下和臼炭坑跡で地鎮祭。創立者桑原玉市氏。雁巣に村営住宅10戸落成。

9月に米軍の雁巣基地で第315空輸部隊の航空ショーが開かれる。

奈多の海苔養殖漁家9戸となる。

11月、和臼小学校体育館講堂（未完）で町制施行式典が施行される。

1955年（昭和30年）

1月、和臼剣道会発足。

4月、上和臼二反田の笠村氏方の一部を借り受けて和臼幼稚園開園。初代園長、堺 謙太郎氏。

10月、第8回国勢調査、和臼町人口7,985人と発表される。

1956年（昭和31年）

テレビ放送が始まり、和臼町内で7世帯がテレビを購入したとのこと。

奈多海岸一帯、玄海国定公園の指定を受ける。

和臼町、国の財政再建団体の指定を受ける。

当時の和臼町助役 今林久二氏の努力により奈多漁港改築5ヵ年計画（工費7千万円）に着工。補助事業として発足し、今日に継続されている。



奈多漁港を望む

1957年（昭和32年）

3月、和白沖の畑に新開町営住宅が建つ。

4月、明林高校（立花高校の前身）が開校する。

11月、NHKラジオ「早起きどり」の全国放送で「奈多の早魚」について、浜崎宗之助氏、今林松美氏の二人が取材に協力、説明する。（取材は郷土史家の梅林新市氏）

この秋から一部農家で動力耕運機の使用が始まる。

1958年（昭和33年）

1月、和白体育協会発足、初代会長に吉浦弥太郎氏（町議会議長）就任。



体育協会主催 相撲大会、マラソン大会

1959年（昭和34年）

1月、朝日国際マラソン（平和台～雁の巣折り返し）始まる。

和白幼稚園雁巣分園が開園。

11月、志式神社境内で海苔養殖の為の「女相撲大会」。行司は今林松美氏。

1960年（昭和35年）

8月、奈多駅開設。郷土出身のミス・ユニバース日本代表の古野弥生さんから運転手に花束贈呈。このあと古野さんを囲む会を開く。

8月27日、和白町、福岡市へ合併。明治22年以來の村・町の歴史をとじる。福岡市和白出張所開設。初代出張所長 今林久二氏他職員10名。

9月1日、福岡市合併に伴い、出来町を高浜町、和白駅前を和白と改称。

10月1日、第9回国勢調査、和白校区人口8,601人となる。

1961年（昭和36年）

奈多の海苔養殖漁家百戸を超える。

「奈多早魚神事」、福岡県無形文化財の指定を受ける。

国道3号線和白三叉路付近から奈多方面へかけての工場・事業所の建設が進む。

1963年（昭和38年）

和白地区の電話架設台数260台となる。

1964年（昭和39年）

福岡電波学園高校が西戸崎より現在地へ移転。

博多老人ホーム、高宮より三苦黒山へ移設される。当時は老人ホーム社会福祉施設等の老人収容施設は「うば捨て」場の感があり、博多老人ホームの開設でも、田中順海所長は地元町内会への了承協力の必要を求められ、再三の協議で承諾を得て国有林を払い下げ建設された。

9月、東京オリンピック聖火リレーに和白スポーツ少年団の柔道、剣道、なぎなたから16名が参加する。



東京オリンピック聖火リレーのメンバー

1965年（昭和40年）

7月、全国スポーツ少年団リーダー研修会が本栖湖の研修センターで開催され、和白スポーツ少年団より柔道 三角俊一、剣道 堺 学、薙刀 今林美枝子の3名が推薦されて参加する。

10月、第10回国勢調査で和白校区人口10,953人と、初めて1万人を超える。

福岡航空管制所が中裏付（通称 鯨山）に開所する。

1967年（昭和42年）

11月、雁巣飛行場跡の米軍基地返還町民決起大会を開く。

1969年（昭和44年）

和白地区の電話架設台数、千台を突破する。

1970年（昭和45年）

2月、NHK「ふるさとの歌まつり」(九電体育館)に奈多の早魚神事を特別公開する。

4月～6月、市文化課は下和白4ヶ浦遺蹟調査に続いて6月から高見の調査にかかる。

6月、和白館区内の老人クラブ連合会結成。

10月、雁の巣米軍基地の一部使用が許可され、雁の巣レクリエーションセンター施設の建設が始まる。

第11回国勢調査、和白地区人口13,139人となる。

1971年（昭和46年）

4月、和白出張所が連絡所に縮小された。志賀町が福岡市に合併され、博多湾に隣接する旧粕屋の箱崎、多々良、香椎、和白、志賀各町村はすべて福岡市となる

1972年（昭和47年）

雁の巣米軍基地の施設が撤去され、日本への返還終る。

旧和白町役場庁舎が解体される。跡地には福岡市東消防署和白出張所が設置され、福岡市和白出張所を併設。

福岡市立雁の巣児童体育館建設。基地周辺児童健全育成施設として開館。



雁ノ巣児童体育館

1973年（昭和48年）

1月、海の中道海浜公園計画が発表される。

2月、下和白ニュータウン（美和台）の申込入居が開始される。

4月、奈多創生園が開園。地元関係との再三の交渉により老人福祉施設市東部第1号として国有林払い下げにより開設された。

12月、和白小学校100周年記念式典が行われる。

1974年（昭和49年）

2月、高美台団地の分譲始まる。（3LDK、700万円で120戸）

4月、美和台小学校開校。

6月、和白に福岡朝鮮初中級学校が竣工する。

11月、西方町内公民館が落成する。

1975年（昭和50年）

1月、福岡市和白下水処理場（奈多新開）開設、稼働開始。福岡市東部の住環境開発整備のため、水処理施設の開設を海面に近い奈多新開に選定。地元自治会、並びに関係者に計画説明開催。数回繰り返すと共に他都市の施設視察、見学等により地元代表者等の説得と、地域将来も考慮して地元の了承と地主関係の協力のもとに昭和47年9月起工、49年10月竣工。50年1月開設稼働し、其後施設が充促整備され処理区域の拡大と整備がなされて来た。

第12回国勢調査で和白、奈多地区人口10,265人、美和台9,790人、和白東5,711人、計25,766人となる。

1976年（昭和51年）

和白東小学校が開校。（生徒数727人）

1977年（昭和52年）

3月、奈多団地東側第1、第2棟入居開始。奈多団地開発は、下水処理場開設地の隣地に連続地域で汚物処理施設があることの嫌悪を予測して、市の開発要望による市住宅供給公社中高層分譲住宅の開発計画により、用地買収、宅地造成がなされていた。建築工事起工は昭和50年5月。

福岡航空管制部が小瀬抜へ移設される。

美和台公民館が開館する。



奈多団地造成前の風景

1978年（昭和53年）

4月、19年毎の志式神社御遷座祭が盛大に行われる。

5月、和白体育協会20周年式典が行われる。和白東公民館が開館する。

1979年（昭和54年）

サニー奈多店が開店、奈多フレンドも開店する。（奈多団地内）

従来、市外通話扱いであった電話が市内通話扱いとなる。局番606-0000。

1980年（昭和55年）

4月 和白丘中学校が開校する。

10月 第13回国勢調査で和白校区15,89人、美和台校区10,631人、和白東校区10,016人、計35,736人となる。

1981年（昭和56年）

4月、奈多小学校が開校する。

奈多団地10,088戸が完成する。

奈多校区自治連合会、奈多校区体育協会が和白校区から分離、発足する。

奈多漁業共同組合、博多湾北部海域漁業権補償交渉で福岡市と妥結（海苔）

10月、国営海の中道海浜公園が開園する。

1982年（昭和57年）

10月、奈多海苔養殖漁業終る。

1985年（昭和60年）

5月、福岡市奈多公民館が開館する。初代館長 今林松美、主事 今林武光、管理人 迫がある、補助要員 今林ミチ子、今林瑛子の皆さんでスタートする。

10月、第14回国勢調査、世帯数2,620、人口9,767人。



福岡市 奈多公民館開館



1988年（昭和63年）

3月、中央区高宮より筑紫少女苑が雁巣の小瀬抜に移設される。

1989年（昭和64年、平成元年）

3月、三苦～雁の巣間のパークウェイが開通する。

海の中道に水族館が開館し、イルカショーが始まる。

10月、雁の巣レクリエーションセンター内に、ダイエーホークス2軍の球場が開場する。

1990年（平成2年）

奈多小学校創立10周年記念式典が挙行される。

10月、第15回国勢調査、奈多校区世帯数2,899 人口10,461人（男4,879人、女5,582人）



奈多小学校

1991年（平成3年）

11月、奈多校区自治連合会、奈多校区体育協会が創立10周年記念式典を挙げる。

1992年（平成4年）

7月、雁巣レクリエーションセンター内に福岡市少年野球場が開設される。

1994年（平成6年）

異常湧水で時間給水続く。

1995年（平成7年）

6月、奈多公民館開館10周年を祝う会を挙げる。

語り部として直接お話をお聞きした人々

稲光 種麿氏（明治10年生～昭和36年没）志式神社宮司

浜崎宗之助氏（明治11年生～昭和33年没）古枅屋、元和白村長

今林 信雄氏（明治?年生～平成2年没） 奈多漁業について

井田 さだ氏（明治32年生～昭和58年没）大網祖父の話

今林 久二氏（明治42年生～平成13年没）元福岡市議会副議長 元奈多公民館運審委員長

参考文献

和白文化研究会「わじろ」（末信源蔵氏）

糟屋郡誌（大正13年 粕屋郡役所）

筑豊沿海誌（大正6年 筑豊水産組合）

立花口史（立花口郷土史会）

筑前史料 書（昭和53年刊）

日本歴史年表（昭和45年版）

奈多歴史年表（今林松美編）

肥筑豊州誌（昭和46年刊）

筑前戦国史（吉永正春氏）

筑前竹槍一揆（紫村一重氏）

奈多大網古文書（今林章男氏蔵）

筑紫史談（大正年間刊）

海の中道の女（長谷川伸氏）

N H K 報告資料（梅林新市氏）

福岡県神社史（大日本神祇会 昭和19年刊）

福岡市漁村史